

昭和初期の洋画家・
佐伯祐三の生涯

調査研究係 水川 和美

はじめに

大阪府大阪市出身で昭和初期の洋画家、佐伯祐三の生涯（1898～1928年）と作品を微力ながら紹介したいと思います。

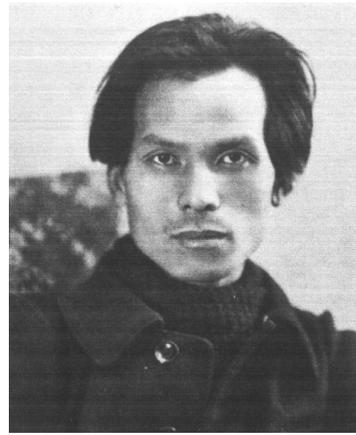
著者・熊田 司氏は、日本近代洋画に関心持つ人ならば忘れられない響きを持つ名であろう。

幾何学的抽象を生み出し戦後美術へと橋渡しされたと記している。

佐伯は1898年（明治31年）4月28日大阪府大阪市北区中津「浄土真宗本願寺」の四男三女の次男として生まれ、幼い頃は「秀丸」と呼ばれ、気質のやさしい子供で、平和で幸福な幼年期を過ごした。中学校時代の彼は「ずぼ」というあだ名をつけられていた、ずぼらの敬称である。

14歳の頃、水彩画を好んだ従兄の影響を受け、美術・音楽に興味を持ち1915年（大正4年）何が何でも絵の道に進みたい祐三は

両親を説得して「赤松洋画塾」に入門しデッサンの指導を受ける。面白くて、この道に進みたいと考えるようになった。



所蔵名：1 佐伯祐三「在りし日の…」
撮影年・所蔵名不詳

画家への歩み

1917年（大正6年）中学卒業後、東京美術学校準備の為、日本画家「川端玉章」が開いた「川端画学校」に入り、洋画家「藤島武二」に石膏デッサンの指導を受ける。ここで「山田新一」と知り合う。佐伯と生涯にわたり親交を結ぶ画家である。

1918年（大正7年）20歳、東京美術西洋学科に入学、藤島武二をはじめ「長原孝太郎」や「小林萬吾」に石膏デッサン、油絵の指導を受ける。友人と千葉・御宿や静岡・網代で描いた作品、御宿の海「勝浦風景」がある。

この頃1919年（大正8年）妻となる、池田米子と知り合う、父の死、相次ぐ近親の死とは反対に明るく光もさし、その年の秋、1920年（大正9年）米子と結婚し下落合の新居、アトリエ付で恵まれた出発をしている。1921年（大正10年）下期から翌年にかけて体調不調で学校を休学する。

1922年（大正11年）長女「弥智子」が生まれ、翌年・東京美術学校卒業。卒業制作は「裸婦」と「自画像」で卒業した。佐伯が目指したのは「パリ」である。フランス語を習い始め、夢は少しずつ現実味をおびた。関東大震災にあい自宅が半壊、預けてあった渡欧用荷物は全焼し、渡欧の準備をした。

渡欧フランスでの活躍

1923年（大正12年）11月、船で出発。明けて1月に到着後初めてのパリでホテル住まいする。窓から景観を描く「ノートルダム遠望」アカデミー・ド・ラ・グランド・ショーミエールの研究所派へ通い始めて本格的に絵を描く。以前からヴラマンクに魅かれていた佐伯は師事していた先輩の「里見勝蔵」に連れられヴラマンクを訪ねる。そして批評してもらったため持参した1枚の自信作「裸婦」を見せるがヴラマンクからアカデシスムを指摘

され衝撃を受ける。

フランスに来てはじめて外部の冷たい風にさらされ、これまで東京美術学校で身につけてきた画風を一掃し再出発する。連日風景制作に専念する。

アパートに居を移したところから、古い建物や裏町の情景がモチーフになり、ヴラマンクに出会って以後、暗褐色の世界へと急転回する。時にマチエールが重厚である。1925年（大正14年）渡欧してくる兄「祐正」を出迎える。兄とパリの西へ出かけ「ゴシック大聖堂」「ノートルダム」を描く。

9月、第8回サロン・ドートンヌに「ゴシックルドヌリ（靴屋・煉瓦屋）」が入選する。評判を呼んでドイツの絵具商に売れたのをはじめ、アトリエを訪ねた愛好家に作品が売れた。

それを契機にパリにおける画家「佐伯のデビューとなる」、サロン・ドートンヌ後、早々の制作代表作「壁」「運送屋」（大阪中之島美術館蔵）。



所蔵名：2 佐伯祐三「壁」
1925年 大阪中之島美術館蔵

兄「祐正」から帰国する事を説得され一家帰国する。その理由は、経済問題と健康を心配する母の意を受けて決めた。1926年（大正15年）28歳、大阪市北区、光徳寺で旅の疲れを癒した後、東京下落合のアトリエに帰る。佐伯の他に「里見勝蔵・前田寛治・小島善太郎・木下孝則」パリで交友を深めた5人で1930年（昭和5年）協会を結成する。自宅周辺を描く「下落合風景・肥後橋風景・大阪滞船」を描くが制作に対する不満を募るばかり。結局もう一度パリに戻る。

1927年（昭和2年）29歳、連日冬のパリの写生、パリの裏町風景、パリの古い街並み、パリ庶民の生活、アルファベットの洒落た看板文字、など画家として人が変わったような激しい制作を始めた。雨の日など花や卓

上の静物、絵具箱など製作する。

1928年（昭和3年）2月、30歳の後輩の画家「荻須高德」と「山口長男」らと、パリ郊外のモランへ写生旅行に出かけ「煉瓦焼場」などを描いた独特のタッチで佐伯独自のテーマを見出す。（大阪中之島美術館蔵）

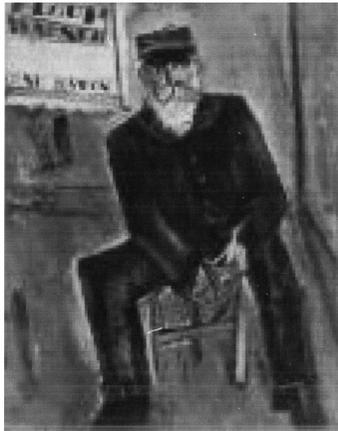


所蔵名：3 佐伯祐三「広告」
1927年 大阪中之島美術館蔵

第20回サロン・ドートンヌに「新聞屋」「広告の有る家」が入選する。
 雨降りや寒さもかまわずに街角での制作で風邪をひいて病床に臥す。屋外で制作できず部屋にこもりきりで、たまたま家を訪れてきた「郵便配達夫」「ロシアの少女」を描く(大阪中之島美術館蔵)。精神面で不安定となり再起することなく30歳余りで生涯を終えた。



所蔵名：4 佐伯祐三「煉瓦焼場」
 1928年 大阪中之島美術館蔵



所蔵名：6 佐伯祐三「郵便配達夫」
 1928年 大阪中之島美術館蔵



所蔵名：5 佐伯祐三「ロシアの少女」
 1928年 大阪中之島美術館蔵

◎引用・参考文献・協力者

- ・ 佐伯祐三の親族 「著作権保持者」
 光徳寺住職 佐伯祐善氏 (大阪市北区中津)
- ・ 大阪中之島美術館
 館長 菅谷富夫氏「図版掲載承諾書」
- ・ その他(書籍) 著者 熊田 司氏(生涯と作品) 他

最後にフォーヴィズム(野獣派)のモーリス・ド・ヴラマンクの一喝によって「佐伯祐三」は白熱的な制作を展開し独自のダイナミックな画風を確立した。
 代表的なモチーフはパリの風景を多く描いた。卒業して5年足らずの短さで作品の数は400点を超えるといわれている。パリに燃えつきた画家でした。